石川 ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

れきはく

No.152
2025.9.9

A

加賀のやきもの産業さきがけの地、金沢城下に出現！

B

令和7年度　秋季特別展

花開く九谷

19世紀加賀藩のやきもの生産ブーム

9.27 sat ▸ 11.9 sun 2025

A：春日山陶器場之図❶　金沢市立玉川図書館蔵
B：色絵魁鳳凰図呉須赤絵写鉢
江戸時代後期（19世紀前半）　金沢卯辰山工芸工房蔵

令和７年度　秋季特別展

花開く九谷

19世紀加賀藩のやきもの生産ブーム

9.27 sat ▸ 11.9 sun 2025

【開館時間】9：00～17：00
（展示室への入室は16：30まで）

江戸時代後期には、技術の広がりや諸藩の産業振興策の影響により列島各地で数多くの窯が成立し、やきもの生産が行われるようになります。こうした流れの中で、加賀藩や支藩の富山藩・大聖寺藩でも多くの窯が築かれます。今日、「再興九谷」と称される窯では色絵製品や日常生活用の陶磁器など幅広い製品がつくられ、やきものづくりの広がりは能登半島にまで及びました。
本展では、それぞれの窯の作品に加え、窯跡や城下町遺跡からの出土資料、窯の経営にかかわる古文書などの多様な資料から19世紀の加賀・能登での陶磁器生産の実態を明らかにします。

プロローグ

九谷古窯跡や金沢城下の出土資料から、やきものづくりが本格的に広がる18世紀以前の加賀藩のやきもの生産と城下町における流通の様子を紹介します。

18世紀以前の加賀藩やきもの事情

第1章　やきものづくり、復活へ ―春日山開窯―

19世紀の加賀・能登における陶磁器生産のさきがけとなったのは、金沢城下のはずれに築かれた春日山窯（かすがやまがま）でした。本章では、春日山窯にかかわった人々やその作品を紹介し、やきものづくりの復活に向けた動きにせまります。

三彩鉢（さんさいばち）

木米作　文化４年～５年（1807～1808）サントリー美術館蔵

京都の陶工・木米（もくべい）が春日山窯（かすがやまがま）で焼成した鉢。
木米の招聘には、京都と金沢の文化人同士のネットワークが大きな役割を果たした。

第2章　軌道にのる生産 ―若杉窯の発展―

春日山窯で目指された陶磁器の量産は、当初期待していた成果を挙げられなかったとみられています。その一方で、小松の若杉窯では文化８年（1811）以降、本格的な陶磁器の量産が行われ、これに対し加賀藩は生産・流通の両面で支援や保護を行いました。本章では現代に伝わった作品に加え、窯跡や金沢・小松といった城下町から出土した資料をもとに、その生産と流通の実態にせまります。

染付桔梗文蓋置（そめつけききょうもんふたおき）

文化11年（1814）出光美術館蔵

若杉窯（わかすぎがま）で最古の紀年銘（きねんめい）を持つ作品。
陶石・陶土の産地を記すほか、銘からはかつて操業した九谷古窯を意識して製作したことがうかがえる。

関連イベント

要申込
定員50名（応募多数の場合は抽選）

記念講演会

ブランドイメージとしての《九谷》の成立

日時：10月4日(土)13:30～15:00
講師：今井　敦 氏
（東京国立博物館 特任研究員）
会場：当館ワークショップルーム
申込締切：9月25日(木)必着

聴講無料

申込不要
※特別展の観覧料が必要です

学芸員による展示解説

日時：
第1回　9月28日(日)13:30～14:30
第2回　10月19日(日)13:30～14:30
第3回　10月29日(水)10:30～11:30
講師：当館学芸員
会場：秋季特別展会場

ワークショップ

要申込
定員15名
（応募多数の場合は抽選）

上絵付に挑戦してみよう！

参加費：1,500円
日　　時：11月2日(日)13:30～15:30
講　　師：金沢卯辰山工芸工房　工房専門員
板屋　成美 氏
会　　場：当館ワークショップルーム
申込締切：10月20日(月) 必着

※小学生以下は保護者同伴。
申込時に保護者のお名前も
明記ください。

申込が必要なイベントは下記の方法で事前にお申し込みください。
【申込方法】当館ホームページのイベント参加申込フォームまたは往復はがき
【記載内容】●希望イベント名●お名前（備考欄に参加者全員）●ご住所●電話番号

観覧料
●一般1,200円(960円)　●大学生・専門学生960円(760円)
●高校生以下無料　※(　)内は団体料金・65歳以上は団体料金
●常設展もあわせてご覧いただけます。
※障害者手帳・「ミライロID」ご提示の方および付添1名は無料
※加賀本多博物館は別途、観覧料が必要です。
※電子チケットもご利用いただけます(日時指定なし)。

主　催　石川県立歴史博物館
特別協力　北國新聞社
後　援　石川県九谷陶磁器商工業協同組合連合会
公益財団法人金沢芸術創造財団
ＮＨＫ金沢放送局

第3章

ブーム来たる
―生産地の広まり―

加賀では、文政7年(1824)開窯の吉田屋窯をはじめとして文政・天保年間を中心に多くの窯が築かれ、その動きは江戸時代前期・中期に陶磁器生産がなかった能登半島にもおよびました。本章では、これらの窯の製品を通してやきものづくりの地域的な広がりを紹介します。

赤絵唐草文六角徳利

江戸時代後期（19世紀）
珠洲市立珠洲焼資料館蔵

能登半島の先端部・珠洲で焼かれた正院窯の作品。正院窯の代表的な銘である「正」が入れられるほか、器面の句からは近隣での瓦生産の様子がうかがえ興味深い。

色絵暦草紙図平鉢

江戸時代後期（19世紀）出光美術館蔵

器面に大きく暦草紙を描いた作品。「文政七年出」および「文政八乙酉」の年号があり、吉田屋窯の開窯間もないころの作品とみられる。

エピローグ

明治への胎動

明治維新を迎えると、藩からの保護の廃止や社会情勢の変動により全国的に多くの窯が廃窯に追い込まれます。一方、加賀ではそれぞれの窯で技術を学んだ者たちが原動力となり、明治以降の飛躍につながります。本章では、そうした過渡期の資料を紹介します。

資料紹介

正院窯の色絵製品にみられる目跡について

学芸主任　野村　将之

令和７年度秋季特別展「花開く九谷 ―19世紀加賀藩のやきもの生産ブーム― 」は、19世紀の加賀藩におけるやきもの生産の広がりを紹介する展示であり、加賀に限らず能登半島で焼かれた陶磁器も多数出品する。このうち、現在の珠洲市で生産された正院窯（しょういんがま）とされる伝世品のなかに、焼成時の痕跡である「目跡（めあと）」を残す事例が確認できたのでここで紹介したい。

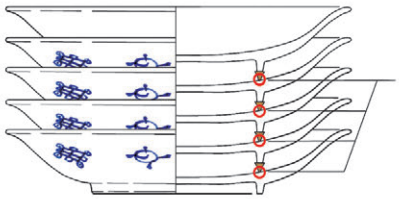
正院窯の開窯年代は文化・文政頃とみる説や、天保初年頃とみる説があり定かではないが、年紀の残る伝世品からは天保７年頃が全盛期であったとみられている。また閉窯年代も定かではないものの、「産物方御用留（さんぶつかたごようどめ）」（金沢市立玉川図書館蔵）所収の、慶応元年（1865）９月に加賀藩産物方から各郡奉行所にあてた通達では、近隣の三杯窯（さんばいがま）の名が見られる一方、正院窯の記述はないことから遅くとも慶応元年には廃窯となっていたことがうかがえる。

さて、本展で出品した「色絵鯉図鉢」（珠洲市立珠洲焼資料館蔵、以下「本資料」）では、上絵具で塗り潰されているものの見込に５つの目跡が確認できる（図１）。目跡とは、窯での焼成で製品を重ね積みする際に、釉薬（ゆうやく）によって製品どうしが熔着（ようちゃく）してしまうのを防ぐために用いられる窯道具の痕跡であり、器面に円形状に釉薬が剥がれた箇所が残る。この重ね積みの技術自体は、同時期の加賀の窯では染付磁器や、灰釉（かいゆう）・鉄釉（てつゆう）の陶器といった、おもに日常生活用の量産品に対して広く使われているものだが、本資料では色絵の素地（そじ）に用いられている点に注目したい。

色絵素地を重ね積みすることについては、上絵具で塗り潰しても目跡を隠しきれないというデメリットがある一方、一度の焼成でより多くの素地を生産できるというメリットがある。通常、目跡などの窯傷を残さずに焼成する場合は重ね積みの最上部に限られ効率が悪いが（図２）、目跡が残っても差し支えない場合は下段でも素地を窯詰めできるため、単純計算でも２倍以上の素地を焼成できることになる（図３）。正院窯は素地をすべて自前で焼成していたのか、あるいは加賀など他から取り寄せたものが含まれるのか不明な部分もあるが、自前で焼成していた場合、効率よく色絵素地を生産する工夫の一環と捉えることができよう。

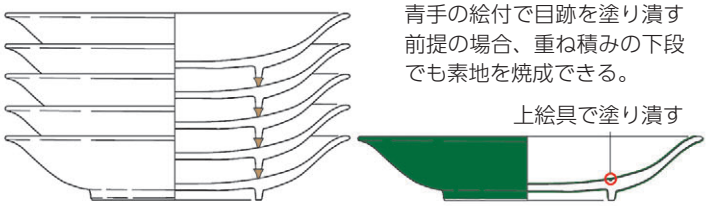
色絵製品に本焼の目跡が残る事例として、嘉永元年（1848）の開窯とみられる松山窯の伝世品に一定数含まれていることが中越康介氏によって紹介されている。正院窯の操業年代が不明確であるものの、天保７年頃を全盛期とするこれまでの説に従うならば、松山窯に先んじてこの手法が用いられていた可能性が出てくる。今後の課題として、正院窯の伝世品全体に占める「目跡素地」の割合、同じく色絵製品に目跡が残る松山窯との関連の有無などが挙げられる。正院窯は操業した年代や具体的な窯の所在地が不明であるなど謎の多い窯であるが、今回の発見をきっかけとして、研究を進めていきたい。

【図１】「色絵鯉図鉢」
（珠洲市立珠洲焼資料館蔵）に残る目跡



目跡（窯道具によって器面に生じる傷）が残るため、重ね積みの下段では色絵の素地を焼成できない。

【図２】従来の素地の重ね積み（イメージ）



【図３】目跡を塗り潰すことを前提とした素地の重ね積み（イメージ）

学芸員
コラム
Column

仏像がつないだ縁

学芸員　中井　夏帆

私は「美術」を専門分野とする学芸員として歴史博物館に勤めています。一口に「美術」といっても彫刻・絵画・工芸といったジャンルに分かれており、その中でも古い時代、新しい時代と分かれます。私はこれまで特に仏教彫刻（仏像）の歴史について、特に平安時代以前の作品を中心に学んできました。

令和６年４月に着任した私にとっての喫緊の課題は、令和６年能登半島地震によって被災した仏像を救出することでした。４月中旬、内灘町在住の個人の方からの要請を受け、地震により半壊した家の仏壇に残されていた仏像と掛軸をレスキューしに行きました。木でできたその仏像は、光背（こうはい）（仏が発する光を視覚化し、仏像の背後にあらわしたもの）や台座を含めても40cmほどの大きさです（図１）。作業を進めながら所有者と話をする中で、「この仏像はいつ頃作られたものなのか」と尋ねられました。私はすぐに答えることができませんでした。仏像そのものの造形表現や、共に伝わった掛軸の年代から、おそらく江戸時代以降に作られたのだろうという想像はできましたが、具体的に何世紀の作なのか、さっぱり判断ができません。これまでの私は、寺院に祀（まつ）られる、ある程度よく知られた仏像のことを勉強するばかりで、個人宅の仏壇に安置される仏像のことを真剣に考えたことがなかったのです。自分の知識不足に恥じ入るとともに、学芸員には幅広い知識が求められるということを痛感しました。

９月になると今度は別の個人の方から仏壇に安置される仏像と掛軸を寄附したいというご相談がありました。仏像を観察すると、先に内灘町からレスキューした仏像と、似ているような、似ていないような…。またしても年代判定に悩みました（図２）。この像は後に当館の所蔵品となり、今春開催した特別展「歴史をつなぐ ―石川を語るれきはくコレクション―」で展示することになりました。すると展覧会をご覧になった、また別の個人の方から問い合わせがあったのです。「うちの仏壇にも似たような仏像があるので、調べてもらえませんか。」

個人の方が所有する仏像は寺院に安置される仏像とは異なり、所有者からの情報提供がない限り私たちが直接アクセスする機会はほとんどありません。しかし約１年半で、まるで仏像が縁をつないでくれたかのように、たくさんの仏像と巡り合うことができました。個人宅の仏壇に祀られたこれらの仏像については、まだまだ分からないことが多く、調査を進めている最中です。この先も様々な仏像と出会えることを楽しみに研究を続け、いつか展覧会という形でその成果をお披露目する機会を作りたいと考えています。

（図１）阿弥陀如来立像
江戸時代～明治時代　個人蔵

（図２）阿弥陀如来立像
江戸時代　当館蔵

特集 令和6年能登半島地震

令和６年能登半島地震により、能登半島を中心とした石川県内各地で多数の文化財が甚大な被害を受けました。当館では発災直後より文化財レスキュー事業に関わってきましたが、救出された文化財一つひとつが地域の歴史や文化を守り伝えるものであることを再認識する機会となっています。今年度の「特集　令和６年能登半島地震によせて」では、被災した文化財、被災地よりレスキューされた文化財をテーマとし、その歴史的意義や当館学芸員が考えたことを発信します。

被災した能登の遺跡

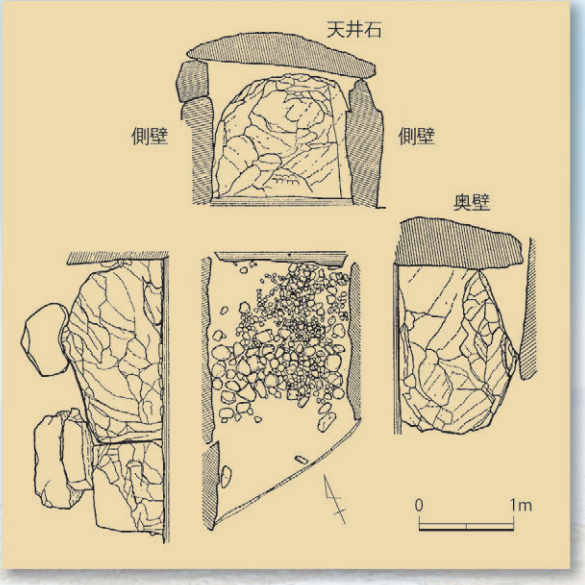
資料課長　三浦　俊明

令和６年の能登半島地震と豪雨では多くの文化財が被災し、古文書や美術品などの動産文化財だけでなく、古墳や城跡などの遺跡の被害も甚大である。現在も被災文化財の調査や救出が続けられているが、これから修復に向けた動きが本格化していくことになる。ここでは、奥能登の典型的な古墳、いずがま古墳にふれてみたい。

いずがま古墳は能登町七見（しちみ）にあり、古墳時代終末期（６世紀末～７世紀前半）に築造されたと考えられている。墳丘は後の時代の開墾で削られて、奈良県石舞台（いしぶたい）古墳のように、本来は墳丘内にある埋葬施設の横穴式石室（よこあなしきせきしつ）が露出している。石室を覆う天井石は最大径約２．４m、推定される重さ３～４ｔの巨石であるが、残念ながら現在、落下してしまい（写真右端の石材）、石室側壁の一部も破損している。

いずがま古墳の横穴式石室は、板状に割れやすい安山岩（あんざんがん）の石材で構築されており、板石を立てて側壁・奥壁とし、その上に天井石がのせられていた。この石室の特徴は、板石を組み合わせる石棺（せっかん）と同じような構造をもつことである。このタイプの横穴式石室は主に九州・山陰・関東地方に分布し、北陸地方では奥能登に認められる。奥能登の石棺系の横穴式石室は、他の地域から影響を受けた可能性があるが、能登半島で産出する安山岩の板石を巧みに利用した結果、独特なスタイルの石室が生み出されたとみられる。

2016年の熊本地震では約50基の古墳が被害を受け、今もその復旧が続けられている。いずがま古墳のように、古墳は後世に改変されていることが多く、築造当初の状態を保っているわけではない。遺跡は歴史的に長い時間をかけて形成されてきたので、どの時点の姿に戻すことが修復と言えるのか判断が難しい場合がある。能登の被災遺跡の復旧には多くの時間がかかりそうであるが、復旧の過程で遺跡の歴史的意義を再評価していくことも大切な取り組みと考えている。



いずがま古墳 石室図面
（出典：能都町『能都町史 第３巻 歴史編』1982年）

いずがま古墳 石室写真

によせて Vol.7

襖の下張り文書がもつ可能性

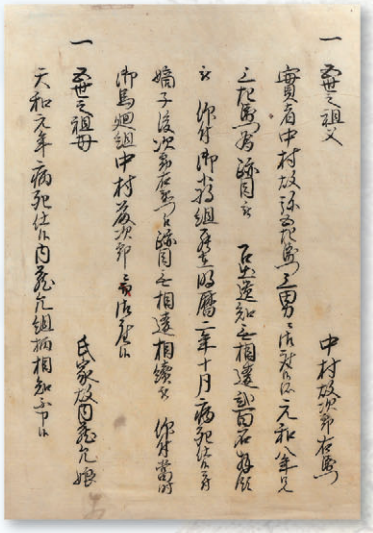
学芸主任　林　亮太

ここ最近、展覧会関係の調査に出かけることが多い。博物館や図書館もあれば、個人宅にお邪魔することもある。これらの調査の場合は、閲覧する史料の大まかな内容は事前にわかっている。だが、レスキューの現場ではそうはいかない。どのような史料があるか基本的にわからない。なかには、おそらく何十年、あるいは何百年誰もみていないであろう史料もある。また、レスキューの現場では、普段の生活のなかに隠れ、意識されていない史料と出会うこともある。その一つが襖の下張り文書である。昔は、襖を作る際に、表面の下に補強のため古い紙を貼っていた。その古い紙は、今では貴重な史料であることが多い。普段、目にすることがない下張り文書は、震災により襖が破れるなどして所蔵者の方が気付き、当館にご相談いただくことがある。その後、現地での確認作業を経て襖ごとレスキューしている。

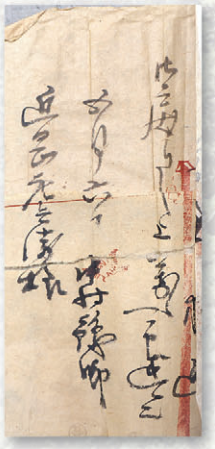
下張り文書は、紙が何層にも重なっており、一見するだけではどのような史料が含まれているのかわからないことが多いが、稀にわかるものもある。たとえば、七尾市内でレスキューした事例がある。貼られていた江戸時代中期（18世紀）～明治時代後期（20世紀初頭）頃の文書をみると、「中村」と書かれた文書が散見されることに気付いた。また、この襖の下張りからすでに剥がれた文書も拝見したが、それは中村家の当主が先祖の経歴を記した「由緒帳」であった（図１）。書式や内容から、加賀藩士の中村家であることはわかったが、中村姓の加賀藩士は300家以上あるので、特定には時間がかかりそうだ、と思っていた。しかし、下張り文書をよくみると、「中村豫卿」と書かれたものがあることに気付いた（図２）。中村豫卿（知左衛門）とは、加賀藩の与力で明倫堂（加賀藩の藩校）の漢学助教などをつとめた人物である。豫卿の家の文書については、すでに金沢市立玉川図書館近世史料館に寄贈されており、目録（『中村石蘭亭文庫』）も刊行されていたので、私は「豫卿」という名前でどの中村家か特定できたのであった。

ただ、ここで一つ疑問に思った。なぜ金沢に住んでいたはずの家の文書が七尾にあるのかと。それも豫卿の経歴を調べるとすぐにわかった。実は、豫卿は明治５年（1872）に七尾へ移住し、七尾小学校で教鞭をとっていたのであった。

この下張り文書には、中村家が七尾に移住したあとの文書が複数含まれていると考えられる。このように襖のなかには、まだ見ぬ史料が人知れず眠っており、重要な史料が含まれている可能性もある。文化財レスキューの活動を通じてそのことを再認識した。



【図１】



【図２】

当館の主な文化財レスキュー活動状況
【令和７年７月～８月】

期　日	曜日	活動内容
7月 4日	金	輪島市　漆器組合　現地調査
7月 9日	水	七尾市　個人宅　現地調査
7月26日	土	令和７年度夏季特別展「未来へつなぐ ― 能登半島地震とレスキュー文化財 ―」開幕
7月29日	火	輪島市　個人宅　レスキュー
8月22日	金	文化財保存修復学会の協力による被災文化財の修理設計のための調査（輪島市からの避難資料）
8月26日	火	輪島市　個人宅　現地調査
8月28日	木	七尾市　個人宅　文防レスキュー参加
8月29日	金	七尾市　個人宅　文防レスキュー参加 金沢文化振興財団の下張り文書整理作業に協力
8月30日	土	いしかわ歴史資料保全ネットワークの協力による被災古文書の整理作業

文化財レスキューとは

地震で被害を受けた、もしくは倒壊しそうな建物に残された「文化財」の救出避難・応急措置・一時保管を実施する事業です。
石川県では国の文化財防災センターと連携して学芸員らによるレスキュー隊を編成しており、当館も県立博物館として活動にあたっています。
なお、ここで言う「文化財」とは、地域の歴史を伝える有形文化財や有形民俗文化財を指しますが、指定の有無は問いません。

催し物案内 Information

各種講座などの情報をお知らせします。
※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします。

10月 休館日：なし

11日（土） 石川の歴史遺産セミナー 13:30～15:00 聴講無料／要申込
「やきものにみる加賀藩の産業」第１回
「再興九谷 ― その新たなはじまりと系譜 ― 」
講師：藤田 邦雄 氏（元(公財)石川県埋蔵文化財センター所長）

18日（土） 石川の歴史遺産セミナー 13:30～15:00 聴講無料／要申込
「やきものにみる加賀藩の産業」第２回
「高松瓦の生産について」
講師：袖吉 正樹 氏（加能地域史研究会副代表）

25日（土） れきはくゼミナール 13:30～15:00 聴講無料／申込不要
「19世紀加賀・能登のやきもの生産技術の展開」
講師：野村 将之（当館学芸主任）

11月 休館日：11/10(月)～11/11(火)

1日（土） 石川の歴史遺産セミナー 13:30～15:00 聴講無料／要申込
「やきものにみる加賀藩の産業」第３回
「窯業史から見る九谷」
講師：佐々木 達夫 氏（金沢大学名誉教授）

5日（水） いしかわ歴史講座 13:30～15:00 聴講無料／申込不要
「縄文人の装い」講師：野村 将之（当館学芸主任）

13日（木） 令和７年度中期古文書講座 第１回 聴講無料／要申込 13:30～15:00
講師：林 亮太（当館学芸主任）

19日（水） いしかわ歴史講座 13:30～15:00 聴講無料／申込不要
「古代の木簡を読み解く」講師：三浦 俊明（当館資料課長）

20日（木） 令和７年度中期古文書講座 第２回 聴講無料／要申込 13:30～15:00
講師：林 亮太（当館学芸主任）

22日（土） れきはくゼミナール 13:30～15:00 聴講無料／申込不要
「地廻り海運が結ぶ加賀と能登 ― 干鰯流通を手がかりに ― 」
講師：吉田 朋生（当館学芸員）

12月 休館日：12月１日(月)、12/29(月)～12/31(水)

3日（水） いしかわ歴史講座 13:30～15:00 聴講無料／申込不要
「加賀・能登における鎌倉新仏教の受容と展開」
講師：中井 夏帆（当館学芸員）

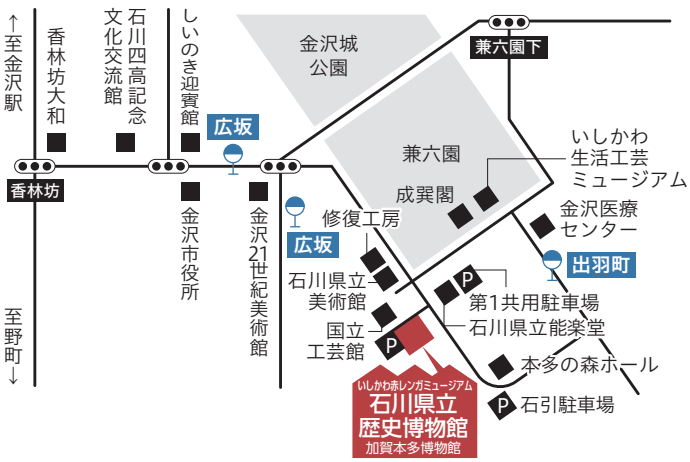
13日（土） れきはくゼミナール 13:30～15:00 聴講無料／申込不要
「軍事郵便にみる兵士たちの声」講師：齋藤 仁志（当館学芸主任）

17日（水） いしかわ歴史講座 13:30～15:00 聴講無料／申込不要
「城下町金沢の構造」講師：林 亮太（当館学芸主任）

お知らせ

令和７年度も「いしかわ歴史講座」を開催します！

当館では毎年度下半期に、学芸員が常設展示の内容に沿いながら石川の歴史や文化についてお話しする「いしかわ歴史講座」を開講しています。11月からはじまり月１回もしくは月２回（水曜日実施・計９回）の講座です。石川県の歴史・文化に興味がある方、当館の常設展示の内容をもっと深く知りたい方はぜひご参加ください。詳細は当館ホームページをご覧ください。



いしかわ赤レンガミュージアム
石川県立歴史博物館
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1
TEL：076-262-3236　FAX：076-262-1836
E-mail：rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp
https://ishikawa-rekihaku.jp/